



[果樹部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

6. モモの新しい病害‘くもの巣病’の発生

[要約]

県南のモモ栽培圃場で発生した、葉柄付近に不整形の褐色斑を生じて枝葉が枯死する障害は、*Rhizoctonia solani* AG-1 IBによる新病害（‘くもの巣病’）である。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 病虫研究室

[連絡先] 電話 086-955-0543

[分類] 情報

[背景・ねらい]

令和元年8月、県南部のモモ栽培圃場において、モモの枝葉が枯死する障害が発生したので、原因を究明する。

[成果の内容・特徴]

1. 本病の症状は8月上旬頃から葉に発生し、葉柄付近の葉身または葉縁部に不整形の褐色斑を生じ（図1）、次第に全体が侵され褐変枯死する（図2）。枯死葉には病原菌の菌糸が絡まりあって枝に付着し、ほとんど落葉しない。激しいものでは、枝にまで菌糸が蔓延し、枯死を生じる（図3）。
2. 病斑部または枯死枝上には、糸状菌である *Rhizoctonia* 属菌の菌糸が認められる（図4）。
3. 本寄生菌のモモの葉への病原性に品種間差異はなく、モモ以外のセイヨウナシ、ニホンナシ、チュウゴクナシの葉にも病原性を示す（データ省略）。
4. 本菌の素寒天培地上の性状は、*Rhizoctonia solani* の特徴を有しており（図4）、rDNA-ITS領域の塩基配列が、AG-1 IBと一致する（データ省略）。

[成果の活用面・留意点]

1. 伝染源となる罹病葉や枝を集めて園外に持ち出し、適切に処理する。
2. *Rhizoctonia* 属菌は多犯性で、他作物（ナシ等）にも病原性を示すため、他作物での発生にも注意する。
3. 高湿度は本病の発生を助長するため、過繁茂とならない枝管理を行う。
4. *Rhizoctonia solani* AG-1 IBによるモモの病害は国内では未確認であることから、日本植物病理学会に新称として、‘くもの巣病’を提案している。



[具体的データ]



図1 葉の褐色斑（矢印）



図2 葉の褐変枯死



図3 枝に蔓延した菌糸（矢印）



図4 分離菌の菌糸形態

[その他]

研究課題名：病虫害・生育障害の診断と対策指導

予算区分・研究期間：県単・令和元～2年度

研究担当者：高田真里、桐野菜美子、金谷寛子、戸田武（秋田県立大）